

ナブル・カマガヤ
小学校卒業のビラ
ーン民族の奨学
生。辺境の初等教
育拠点、ナブルで
はこの3月、2期生
51名の卒業を祝い
ました。



2017年4月25日発行

NPO法人ビラーンの医療と自立を支える会

(英文名略称・HANDS)

本部：〒227-0033 横浜市青葉区鴨志田町516-11

TEL & FAX:045-500-9151

E-mail: hands-mindanao@nifty.com

<http://hands-mindanao.a.la9.jp/>

郵便振替口座 00210-5-72693

(加入者名) ビラーンの医療と自立を支える会

支援を通じて考える：マイクロとマクロ

副代表：古川順一

1. 天皇皇后両陛下のフィリピンご訪問再考

87号で触れましたように、両陛下は、2016年1月フィリピンを訪問され、まずフィリピン「無名戦士の墓」に献花されました。

第2次大戦中、海外に在住していた日系人にも多数の犠牲者が出ましたが、うち最も多かったのは、フィリピンにおける約51万人と言われていました。アメリカ人も約1万5千人がフィリピンで戦死しました。一方、フィリピン人の死者の数は約111万人にも上りました。恐ろしい数字です。

両陛下が、まず無名戦士の墓に行かれた理由もここにあるように思います。

2. 残留日本人2世とベンゲット移民

87号では、フィリピン残留日本人2世について書きました。両陛下は、ダバオ市やバギオ市から集まった彼らを接見なさいました。

ところでなぜ日本人がダバオ市やバギオ市に多く在留していたのでしょうか。その理由の一つが、明治末の日本からの労働移民の存在です。

20世紀初めに、フィリピンを植民地としたアメリカは、高地にあるバギオを夏の避暑地として開発するため、マニラからの直通道路の建設を計画しました。そのうち、バギオのあるベンゲット州での工事に、日本人が労働者として多数雇用されました。1905年の工事終了後、バギオに残るケースもありましたが、マニラ麻の産地であるミンダナオ島のダバオ市で、その生産に従事する人も多数いました。

両陛下は1962年、皇太子・妃時代に、ご名代としてフィリピンを訪問された際、バギオ市にあるベンゲット道路建設中の日本人犠牲者を弔魂する碑を訪問されました。

3. バギオ市とダバオ市の日系人

バギオ市の北にあるキアンガンは、日本軍の最後の司令部が置かれたところです。そして、山下將軍と、連合国との降伏文書調印は、9月2日、バギオ市で執り行われました。降伏後のバギオ日系人の困窮については、87号で、シスター海野の活動で触れました。

一方、マニラ麻栽培に従事するため、ベンゲットでの道路工事終了後、あるいは、新たに日本本土から、ダバオに移住した日本人は、合法・非合法の手段を利用して、先住するバゴボ民族の土地を手に入れました。

マニラ麻は「アバカ」ともいわれ、チボリ族のティナラク織り、ビラーン族のナバルタビ織りの原料です。日本では糸芭蕉といい、沖縄の芭蕉布（重要無形文化財）の素材としてよく知られています。

チボリやビラーンの場合も、アメリカの新植民地政策の一環としてビサヤ族と軍閥により土地を追われました。この構図は、現在もアメリカや日本によるパイナップルやバナナ農園経営、鉱山経営でも見られます。

4. マイクロとマクロの視点

私たちの多くは、たまたまビラーンやチボリの現状を知る機会があり、支援を始めたということかと思えます。そして、今後ともその現状を正しく理解し、支援を継続する上ではマクロからの視点が欠かせません。

ご存知のように、私たちの支援しているビラーン、チボリは、フィリピンの先住民族の一つです。その数は、定義によりますが、40以上とも100以上とも言われます。ビラーンとチボリ支援を通じて、他のフィリピン少数民族の、さらに世界の先住民族の現状に思いを巡らせればと思えます。

マイクロでのビラーン、及びチボリの支援は、私たちのマクロの学びの機会ともなるのではないのでしょうか。